共感的な人はじゃんけんで引き分けが出やすいか？

共感の身体的基礎

串崎真志

(関西大学文学部)

キーワード: 動作の同調、身体感覚、共感

Does empathy increase the probability of a draw?

Masashi KUSHIZAKI

(Dept of psychology, Kansai Univ.)

Key words: motor mimicry, interoception, empathy.

目 的

認知神経科学においては共感の神経基盤のひとつとして自他の共通表象(shared representations)システム、すなわち動作の同調(表情の模倣)や情動の伝染と呼ばれる現象が注目されている(Decety & Ickes, 2009)。動作の同調は日常生活において自然に生じており(Chartrand & Bargh, 1999)、意識されない自動性(automaticity)の過程のひとつと考えられる。動作の同調はうまくいっているカウンセリングなどの共感的な関係で特に起こりやすい(小森・長岡, 2010)。また心拍数の検出などの身体内部受容感覚(interoception)が共感性尺度得点と関連することも示唆されている(Fukushima et al., 2011)。このように動作の同調、身体感覚、共感相互に影響すると考えられる。本研究ではじゃんけんの引き分けを動作の同調の指標とし、身体感覚に対する感受性が高いほど、あるいは共感性が高いほど引き分けが出やすくなるかどうかを検討した。

方 法

全学共通科目の心理学の受講生 132 名が参加した。実施時期は 2010 年 5 月であった。まず下記の 2 種類の質問紙に回答し、そのあと任意の二人組を作ってじゃんけんを 10 回した。1 回ごとに勝ち、負け、引き分けを各自で記録した。最後に二人の間柄として相手に対する親しさの程度を 10 件法で評点した。質問紙は「多次元共感性尺度」(鈴木ら, 2000)の「自己指向的情緒反応」因子から因子負荷量の高い 5 項目(「自分が嬉しいのか相手が嬉しいのか、わからなくなってくることがある」「見知らぬ人が嬉しそうにしているのを見ただけで、自分も嬉しくなる」など。5 件法)、そして身体感覚については「日常生活におけるフォーカシング的経験尺度」(上西, 2010)から「体験過程の吟味」因子の 5 項目(「私は、言いたいことがうまく表現できないときに、からだの感じを確かめることがある」「悩み事があるときには、一度立ち止まってからだの感じを確かめてみる」ところがある」など。5 件法)を使用した。

結 果

じゃんけんの記録や回答に不備があるものを除き、最終的に 106 名(53 組)のデータを分析した。まず個人の体験過程得点を x 軸に、じゃんけんの引き分け数を y 縦軸に散布図を描いたが関連は認められなかった。同様に個人の共感性得点と引き分け数との間にも関連はみられなかった。なお体験過程得点と共感性得点との間には正の相関がみられた($r=.42$)。

そこでペアごとに二人の体験過程得点を足した得点を求め、共感性についても二人の得点を足し合わせた得点を用いることにした。また二人の親しさの合計得点によって、53 組を親しさ低群(10 点以下 12 組: 初対面あるいはそれに近い関係)、中群(11-16 点 11 組)、高群(18 点以上 30 組: お互いによく知っている関係)の 3 群に分けた。

親しさ 3 群それぞれにおいて、体験過程(二人の合計)の中央値によって高低群に分け、各群におけるじゃんけんの総試行回数と引き分け総数を数え、 $p=1/3$ 試行回数 n の二項分布において、その引き分け総数以上になる確率を求めた。その結果、親しさ低群の体験過程高群において($p=.0020$)、親しさ中群では逆に体験過程低群において($p=.0423$)、引き分けの出現率が有意に高いことがわかった(表)。共感性についても同様に二項検定を行ったところ、親しさ低群の共感高群において、引き分けの出現率が有意に高くなっていた($p=.0218$)。親しさ高群においては明確な傾向は認められなかった。

考 察

結果は、初対面に限定されるが、身体感覚そして共感性が高いほど動作の同調が生じやすい傾向がみられ、共感の背景にある身体的要因の影響を示唆するものであった。また引き分け数を共感の指標とみなす可能性も示唆された。個人でなく二人の合計得点が指標になったことは、臨床場面におけるセラピストとクライアントの関係性の理解にも示唆を与えるだろう。近年、身体化認知をはじめ無意識過程の実験研究が盛んである(Casasanto, 2011)。動作の同調などの身体性に注目することで、共感的な関係を支える無意識的な(自動性の)過程を明らかにできると思われる。

表 引き分けの出現率

	体験過程低群		高群	
	低群	高群	共感低群	高群
親しさ低群	0.35	0.52 **	0.40	0.45 *
親しさ中群	0.44 *	0.26	0.40	0.30
親しさ高群	0.38	0.31	0.36	0.33

引用文献

- Casasanto, D. (2011) Different bodies, different minds. *Current Directions in Psychological Science*, 20(6), 378-383.
- Chartrand, T.L. & Bargh, J.A. (1999) The chameleon effect: The perception behavior link and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76(6), 893-910.
- Decety, J. & Ickes, W. (2009) *The social neuroscience of empathy*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Fukushima, H., et al. (2011) Association between interoception and empathy: Evidence from heartbeat-evoked brain potential. *International Journal of Psychophysiology*, 79(2), 259-265.
- 小森政嗣・長岡千賀(2010)心理臨床対話におけるクライアントとカウンセラーの身体動作の関係 認知心理学研究, 8(1), 1-9.
- 鈴木有美他(2000)多次元共感性尺度作成の試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 47, 269-279.
- 上西裕之(2010)日常生活におけるフォーカシング的態度と Alexithymia 傾向との関連 関西大学心理相談室紀要, 12, 57-64.